

# ローマ時代ユダヤ人の離散状況

## —ラマッラー～ナブルス間(パレスチナ自治区)における分布調査(2023年)—

長尾 琢磨 慶應義塾大学非常勤講師

### The Dispersion of the Jewish in Roman Period: Survey between Ramallah and Nablus, Palestine (2023)

NAGAO, Takuma Part-time Lecturer, Keio University

#### 1. はじめに

1世紀後半、第一次ユダヤ戦争の結果、エルサレムは陥落しユダヤ人の離散は進んでいった。2世紀前半には第二次ユダヤ戦争が起り、敗北したユダヤ人はエルサレム周辺への立ち入りを禁じられ、離散の民となった。その後は、一度地中海側のヤブネなどに逃げた後、4世紀頃にガリラヤ地方に中心を移したとされている。

ユダヤ人の拡散の経緯を明確にすることは、ラビ・ユダヤ教がいかんして確立していったのかを理解するうえで重要であるが、ガリラヤ地方に中心を移すまでのユダヤ人の動向は十分に明らかにされていない。4世紀以前のシナゴグの例に限られること、ユダヤ人の存在を実証するのが考古学的に困難であることが要因として考えられる。このような状況を踏まえ、筆者はロクリ墓と呼称される横穴墓がこの課題を検討する上で新しい資料になると考えた。ローマ時代以降の同墓の利用がほぼユダヤ人に限られ、ビザンツ時代まで継続して利用されているためである。

ユダヤ・サマリア地方ではシナゴグがほとんど確認されておらず、ユダヤ人共同体がほとんど存在しなかったと考えられている。しかし、この点には、ユダヤ・サマリア地方の大部分が、調査研究が極めて不足しているヨルダン川西岸地区に位置していることが大きく影響を与えていると考えられる。そこで、筆者はローマ時代ユダヤ人の離散状況を再検討するため、パレスチナ自治区、特にエルサレム以北のラマッラー～ナブルス間で墓地を主対象とした分布調査を行った。

#### 2. 調査の経緯

パレスチナ自治区の墓地はほとんど知られておらず、

同自治区の文化遺産を管理するパレスチナ観光・遺跡庁の報告書を刊行する体制が整っていないため、情報はほとんど外部に向けて公開されていない。そこで、筆者はパレスチナ観光・遺跡庁の協力のもと、2018年、2019年にラマッラー～ナブルス間における三次元計測を伴う墓地の分布調査を行った(長尾 2023)。当初は、パレスチナ自治区の墓がユダヤ人の離散前後のどちらに造られたもので、どのような構造・形態であるのかを明らかにすることを目的としていた。その結果、これまでエルサレムでしか確認されていなかったグレコ・ローマン様式のファサードを持つ墓が存在しており、装飾や墓の構造からユダヤ人の離散以降の墓である可能性が高いことが明らかとなった。

その後、コロナ禍などの影響で調査が滞っていたが、2023年に調査を再開した。過年度の調査と目的は重なるが、これまでの成果を踏まえ、ローマ時代ユダヤ人の離散状況を再検討することを主目的とした。本発表では、この2023年調査の成果の一部を報告する(図1)。なお、本調査は筆者が単独で行っているが、パレスチナ観光・遺跡庁のアウニー・シャワムラ氏(Awni Shawamra)、スフィヤン・イダイス氏(Sufyan Idais)に協力いただいている。

#### 3. カラワット・バニ・ハサンの墓地

カラワット・バニ・ハサン(Qarawat Bani Hassan)はナブルスの南西約18kmにある村であり、墓地は村の中心部より南東約600mに位置している。パレスチナ観光・遺跡庁による調査は行われていないが、過去に踏査が行われている(Conder and Kitchener 1882; Magen 2008)。デル・エド・ダルブ(Deir ed-Derb)と呼称されるロクリ墓がスケッチと共に報告されているが、正確な測量はこれまで行われていない。

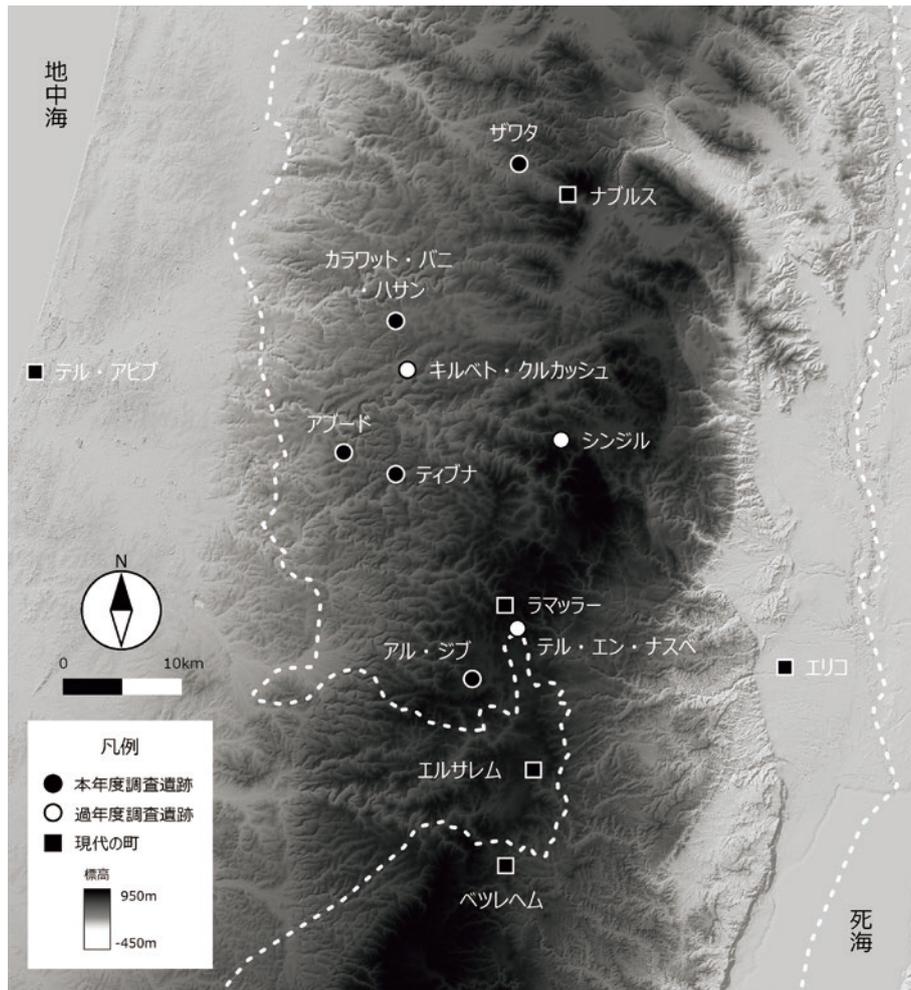


図1 調査遺跡の位置

本調査では同墓周辺の踏査と三次元計測を行った。

村から東に下る道沿いには、デル・エド・ダルブの墓(図2)が位置しており、同墓の一段下の斜面には2基の横穴墓が確認された。岩盤の崩落が著しくこれらの横穴墓の内部構造を確認することはできていない。周辺一帯には石切場が見られ、横穴墓は石切場によって生じた垂直な岩壁を利用して造られていた。石切場は、村の南東部の広範囲に広がっており、他にも石切場を利用した墓が存在している可能性は高く、今後は調査範囲を広げ悉皆的に確認する予定である。

デル・エド・ダルブの墓は、岩盤を広範囲に掘削して造られており、階段を下り前庭部に繋がる構造となっていた。前庭部の南側には壁付き柱の間に2本の柱を持つグレコ・ローマン様式のファサードが岩盤を切り出して造られていた。ファサードの奥には玄関があり、その壁には切石風の装飾が施されていた。切石の縁には線が刻まれており、このようなタイプはヘロデ朝時代の切石積み建築に特有の様式として知られて

いる。墓の入口の右手には、入口と繋がる壁龕が作られていた。これは円形の封石(ローリングストーン)を転がすためのシステムであり、入口にそれを受ける溝も確認された。

入口から内部に入ると、ロクリ(奥に長い壁龕)を持つ主室があり、その東西にそれぞれアルコソリア(開口部がアーチ状であり、幅が広い壁龕)を持つ部屋が作られていた。東部屋のみピットの四隅に円柱状の装飾が施されていた。過去の踏査では、同墓の内部は定形且つ精巧な造りであるようにスケッチされていたが、三次元計測を行った結果、内部は墓の外部に対して西側に大きく傾いており、各部屋も歪んで造られていたことが明らかとなった。このような墓は定形に造られることが大半であり、この点で同墓は粗雑な造りであるといえる。

ユダヤ人の拡散に伴い、1世紀前半には各地方で多数のロクリ墓が造られたが、同時期にはグレコ・ローマン様式のファサードを持つ墓はエルサレムでしか確

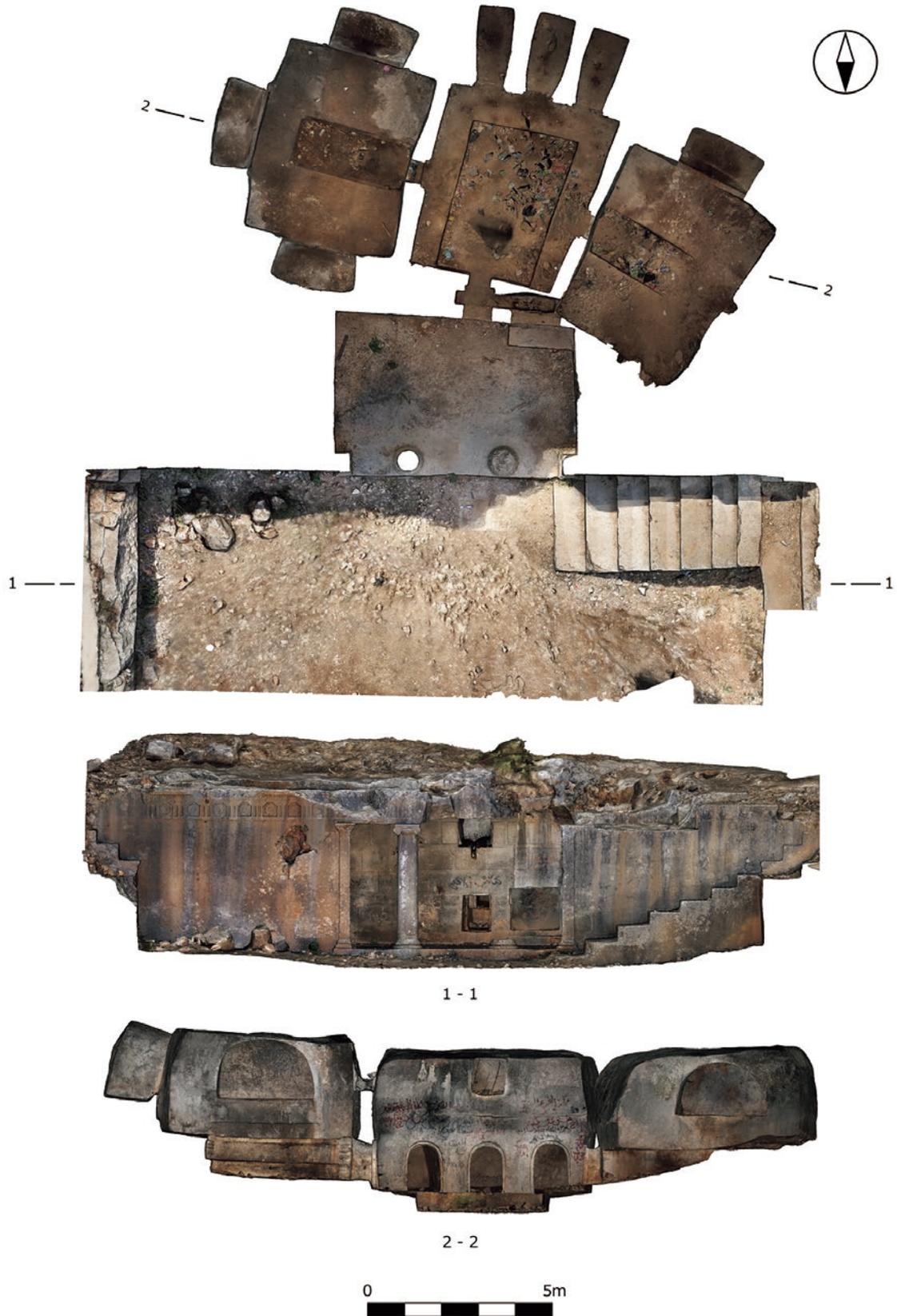


図2 デル・エド・ダルブの墓 平面図・断面図(オルソ画像、筆者作成)



図3 破損したロクリ墓(北から撮影)



図4 アルコソリア墓南壁

認されていない。このような墓がエルサレム以外で見られるようになるのは、1世紀後半～2世紀頃であり、同墓もこの時期に位置づけられると推定される。円形の封石やアルコソリアもエルサレム外では1世紀後半～2世紀に例があり、この年代と合致している。

また、同墓はファサードの装飾と切石風装飾の点で、前1世紀末～1世紀のエルサレムのウンム・エル・アメドの墓(Kloner and Zissu 2007)と非常に類似しており、この墓を模倣したものである可能性が高い。これまで述べてきた点から、おそらく同墓はエルサレム陥落前後にエルサレム周辺から墓職人を伴って移住したユダヤ人の墓であると考えられる。

#### 4. アブードの墓地

アブード(Aboud)は、ラマッラー～ナブルスの中間にある村であり、町の中心部から約1km西の谷を越えた丘に墓地は位置している。2018年、2019年に筆者が調査を行っており、8基のロクリ墓を確認し、3基の墓について三次元計測を行った。本調査では新たな墓地の簡易的な分布調査を行った。この墓地は過年度の調査墓地と道を挟んだ近くに位置していたが、斜面の下にあること、縦穴墓がその多くを占めていることから、筆者の調査も含めこれまでの調査では全く確認されていなかった。

結果として、1基のロクリ墓(図3)、1基のアルコソリア墓(図4)、数十基の地下式アルコソリア墓(Double Arcosolia Grave)(図5)が確認された。ロクリ墓は破損が著しく、特殊な構造も見られなかったため、年代推定は不可能であった。ロクリ墓の西側近傍に位置するアルコソリア墓は、ビザンツ時代に典型的な奥行きがあり、遺体や石棺を安置する溝を持つタイプであった。入口奥のアルコソリアの壁面には十字架



図5 地下式アルコソリア墓(南西から)

が刻まれていた。これらの横穴墓は少数であり、同様にビザンツ時代に典型的な縦穴墓である地下式アルコソリア墓によって、墓地の大半は占められていた。本調査では総数を把握することはできなかったため、次年度以降ドローンを用いて同墓地の測量調査を行う予定である。

本調査の結果は目的に合致しないものであったが、パレスチナ自治区におけるビザンツ時代の墓地についてもほとんど知られていないため、ローマ時代の墓地と比較するための良い資料となった。アブードは3つの教会堂を有する村であるが、これまでビザンツ時代の墓地は確認されていなかったため、この点でも有意義な発見となった。

#### 5. ザワタの墓

ザワタ(Zawata)は、ナブルスの西部に隣接する村であり、墓は村の中心部より西約700mに位置している。パレスチナ観光・遺跡庁のアウニー・シャワムラ氏によって2023年に発掘調査が行われたが、墓の実測作業や出土遺物の整理が行われていなかったため、



図6 ザワタの墓 平面図・断面図(オルソ画像、筆者作成)

本調査では墓(図6)と出土遺物である石棺(図7)の三次元計測調査を行った。

同墓は、岩壁に玄関が造られているのみであるが、南東奥には円形の封石を転がすための溝が掘られていた。入口を通るとピットを有する主室があり、入口を除く壁面にそれぞれ3つずつロクリが造られていた。なお、完掘後に盗掘の被害を受けたため、測量時にはロクリは破損し、主室の大部分は瓦礫やゴミで埋もれてしまっていた。

同墓の北西壁最奥部のロクリからは、石棺が出土している。銘文や植物をモチーフにした装飾は施されていないが、長辺には方形の装飾が表面に3つ、裏面に2つ施されており、ナブルスの2世紀に造られた墓(Magen 2009)で全く同一の石棺が出土している。入口の構造や石棺から、同墓は1世紀後半～2世紀頃の墓であると推定される。

また、本調査では記録できていないが、1～3世紀に典型的な燭台型ガラス瓶や金属製品も出土しており、今後出土遺物の整理を行い、アウニー・シャワムラ氏と共同で最終報告を行う予定である。

## 6. おわりに

過年度の調査と本年度の調査でラマッラー～ナブルス間に位置する大型墓地の過半数を調査することがで



図7 石棺 展開図(オルソ画像、筆者作成)

きた。4遺跡においてグレコ・ローマン様式のファサードを持つ1世紀後半～2世紀頃の墓地が確認されたことは、エルサレム陥落後に一定数のユダヤ人がユダヤ・サマリア地方に逃げ延び、ある程度のコミュニティを作っていたことを示していると考えられる。これらの墓地は全て盗掘されており遺物を有していないため、第二次ユダヤ戦争以降も利用され続けていたのかを判断することはできないが、ザワタの墓のように遺物を伴う墓の例が増えてくることで、より詳細な離散状況を検討できると考えている。今後は本調査での不足を補うと共に、エルサレム以南も含めて調査遺跡を増やしていきたい。

なお、本調査は公益財団法人高梨学術奨励基金の助成を受け実施した。

### ■参考文献

- ・ Conder, C. R. and H. H. Kitchener 1882 *The Survey of Western Palestine: Memoirs of the Topography, Orography, Hydrography, and Archaeology, vol.2*. London, Committee of the Palestine Exploration Fund.
- ・ Magen, Y. 2008 *Judea and Samaria Researches and Discoveries*. Jerusalem, Staff Officer of Archaeology.
- ・ Magen, Y. 2009 *Flavia Neapolis: Shechem in the Roman Period, Volume 1*. Jerusalem, Staff Officer of Archaeology.
- ・ Kloner, A. and B. Zissu 2007 *The Necropolis of Jerusalem in the Second Temple Period*. Leuven, Peeters Publishers.
- ・ 長尾琢磨 2023 「ラマッラー～ナブルス間(パレスチナ自治区)における墓地の考古学的踏査」『西アジア考古学』第24号 61-75頁 日本西アジア考古学会。